

宮本先生に学んだこと

袴田 渉

宮本久雄先生と初めてお会いしたのは、私が修士課程二年の頃でした。その年、宮本先生は東京大学を退官されて、上智大学神学部に移って行かれました。その後を追って、私と私の将来の妻は、上智大学に入り浸るようになり、先生の授業を聴講させていただくようになりました。思えば、哲学とキリスト教に本格的に触れ始めたのは、私にとってそれが最初でした。

今、宮本先生との数多くの思い出の内、幾ばくかを思い起こしてみます。

いつでしたか、やはり上智大学で先生の受け持つておられた哲学史の講義を聴講していた時、先生はタレスの話を始められました。タレスが「水」という語で言い留めた哲学的原理を見出した時、彼は驚いて「水！」と絶叫したはずであり、その水は、私たちが日常使っている意味での水

ではないこと、それは何か「絶対的なもの」との出会いの驚きを表す言葉であることを、先生は語られていたと記憶しています。先生からそのお話を聴いた私は、何か哲学史の教科書からは読み取ることのできない、哲学の妻みを垣間見た思いがして、胸が高鳴ったこと、そして、哲学的な「直観」とそれを表現する「言葉」の間に大きな差のあることに、新鮮な驚きを感じたことを今も覚えています。

その後、先生のご厚意で、私の専門とするディオニュシオス・アレオパギテースの『神秘神学』と一緒に講読していただいたことがあります。ギリシア語原文の一々の単語や、小辞にさえも引つ掛かりながらたどしく読んでいた私に、読書会の帰り道、先生は「それでいい。これからも、そういう風に読んでいきなさい」と仰って下さいました。そのお言葉が、どれほど私を励ましたことか。

こうしたエピソードは枚挙にいとまがないため、これ以上挙げるのは控えます。ですが、私は、この場をお借りして、これまで私が宮本先生から学んできたこと、そして今も学び続けていることについて書いてみたいと思います。なぜなら、そのことが私にとって、宮本先生と私自身の関係をかけがえのないものになっている、大きな要因だと思わ

れるからです。ただし、それは教科書的な知識や学術的情報のことを言っているわけではありません（勿論、そうした事柄についても先生から多くを学んできましたが、それらは実のところ、先生からでなくても学ぶことのできたものでした）。そうではなくて、私はここで「学問の仕方」について述べてみたいのです。つまり、私はこれまでも、そして今も、先生から「学問の仕方」を学び続けていると考えているのです。そして、その仕方とは、一言で言いますと、何か自分にとって未知のものごと（＝謎）に接近する方法を指しています。それはどういうことなのか、以下に少しく敷衍してみたいと思います。

この「学問の仕方」を教えてくださいました言葉に、「アコルーティン (Akoulothen)」というギリシア語があります。それは、私たちが上智大学に入り浸っていたころ、宮本先生のゼミナールで読まれていたニュッサのグレゴリオスの『モーセの生涯』の中の言葉です。当時、先生が学生たちにも特別な注意を喚起していたのも、この言葉でした。この言葉は、リデル・スコットの希英辞典によれば、もともと兵士の「従軍」や奴隷が主人に「ついて行くこと」を表す動詞で、身分や立場に差異のある者どうしの間に適用

される、「導かれる」・「従う」という意味を表すものなのです。ニュッサのグレゴリオスは、この言葉を神に従うモーセの姿を描写するために用いています。しかも、グレゴリオスは、自らの思想の営みの目的となる「神を見ること」とはいかなる事態かを説明するために、「アコルーティン」を用いているのです。では、それはどういうことでしょうか。今、あの時宮本先生に学んだことを説明してみたいと思います。

まず、グレゴリオスがこの言葉を用いる文脈を追ってみたいと思います。彼は、『モーセの生涯』の中で、『出エジプト記』三三章二一―二三節の次のような文言を取り上げます。

「わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない」(新共同訳)

この場面は、神がモーセに二度目の十戒を授ける前に、

「顔と顔を合わせて」語りかける箇所です。ここでグレゴリオスは、上記の「あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない」という神の言葉を読解して、「神の後ろを見ること」を「神に従い行くこと（アコルーティン）」とした上で、次のような解釈を加えます。

かくして、神にまみえんと熱心に憧れ求めるモーセは、如何にして神を見ることができるかを教えられる。すなわち、何処へ導かれようとも、そこへと神に聴従すること、それこそが神を見ることなのである。（谷隆一郎訳『モーセの生涯』PG 44, 408D）

「神に従い行く（聴従すること）」は、ここでは「神を見ること」と解釈されます。それはなぜでしょうか。『出エジプト記』（三三章一一節）によれば、モーセはすでに神と「顔と顔を合わせて」語り合っていたのですから、このことをもって「神を見ること」の成就としてもよいように思われます。ですが、グレゴリオスは、神と顔と顔を合わせた対面的な事態ではなく、むしろ神の背後から従い行くことこそ「神を見ること」と捉えたのです。そのように考

えるグレゴリオスの理路は、次の通りです。まず彼は、神と対面することを、「善」と対峙することと読み替えます。そして、善と相對するものは、悪に他ならないと考え進めるのです。つまり、善と対面し、それを対象化する行為がここでは悪と見なされているのです（409A-B参照）。グレゴリオスにとって、神は「無限」であるため、どのような意味でも神を限定することはできないし、神を限定する行為は、無限なる神に反することであるために、端的に悪とされるのです。従って、神の無限性を損なうことなく「神を見ること」は、神に対面するのではなく、その背後から従い行くこと、そして神に決して追いつけずに「神を見ること」への欲望がどこまでも満たされないという、まさにそのことによって可能になると、グレゴリオスは考えます。つまり、神に従うという「無限」の運動に入るといふ行為そのものが、「神を見ること」と言われているのです（404B-405A参照）。

では、このような「神に従い行くこと（アコルーティン）」と「学問の仕方」とはどのように関わるのでしょうか。このことについて説明するために（話を複雑にして申し訳ないのですが）、以上のような「導き手」としての神と「従う

者」としてのモーセの関係を、人間どうしの師弟関係として類比的に捉え直してみたいと思います。というのも、神はモーセに「神を見ること」を「教える」と言われ、モーセは神から「学ぶ」と言われて、両者が「教える者」と「学ぶ者」の関係で捉えられているからです。勿論、「神」と人間の「師」を具体的に同一視するわけではありませんが、両者の関係については、これを類比的な意味で同じものと想定することはできると思うのです。そこで今、神とモーセの関係を人間の師と弟子の關係に当て嵌めて考えてみます。

その時、弟子は、一般に考えられているように師の知的境地と互角の立場（＝師との対面）を目指し、さらにはこれを凌駕しようとするのではなく、ただ師を導きの星として、彼の辿る知的道行きに従うことになるでしょう。そして、弟子が師の知的道行きに終極はないと信じる限りで、その弟子は、「神を見ること」ならぬ学問や人生上の「謎」に触れることができる、と言えるのではないのでしょうか。ここで、「謎に触れる」と言いましたのは、謎を自らの手中に収めてこれを解消してしまうという意味ではなく、謎を謎として、つまり自分にとって未知のものを未知のまま

にはつきりと見定め、自らの知性はその謎に触れられるくらしいの近みにいるというほどの意味です。言い換えれば、謎に一時的な答えを与えて分かった気になってしまうことなく、決して問いの運動を止めないこと、ただその謎を深めながら、常に謎と共にいることと言えましょう。そして、それは、師の示す知的道行きに従い行くことで実現されると考えられるのです。実に、これこそ、私が宮本先生から、ニュッサのグレゴリオスを通して学んだ「正しく」学問する仕方なのです。

ただし、神ならぬ一人の有限な人間としての師の知的道行きは、必ずしも無限であるとは言えない以上、或る人が自分の師であるかを（例え思い込みであったとしても）信じることができかどうかは、その弟子にかかっていると言えましょう。しかしながら、その人を師と信じ、その師の知的道行きが無限であると直感することができなければ、ここでいう師弟関係は勿論、「正しく学問する仕方」も成立しえないでしょう。この意味で、あくまでも個人的な「信」に基づく師と弟子の關係は、同時に、他の人と代えることのできない、かけがえのないものだと思うのです。そして、私にとっての師は、宮本先生なのです。

ふり返り見れば、私の学問上の歩みは、まさに宮本先生の背にしがみつくようにして辿られてきたものでした。右も左も分からぬ私が、どうにか今日まで学究の道行きを辿ることができているのは、文字通り先生のお陰の下にあり続けているからに他なりません。

また、私が宮本先生に感じているのは、学恩だけではありません。人生のかけがえない時を先生と共に過ごさせていただいたことに、深く恩義を感じています。私と妻の縁をつなぎ留め、二人の結婚式の司式を下さったのも、宮本先生です。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。次第です。